

堀切 実著『蕉風俳論の研究』

堀 信 夫

著者の堀切実氏は各務支考研究の第一人者である。氏は早く十三年前に『支考年譜考証』なる労作を世に問い、これによって第一回の窪田空穂賞を獲得している。

本書も外題は『蕉風俳論の研究』となっているが、内題には「―支考を中心に―」という副題が添えられているように、全編ほとんど支考関係の論文であるといっている。全体の構成を最初にかいつまんで紹介しておこう。第一章「総説」は支考の評伝ないし伝記の考証に関するⅠ「蕉門支考論」、Ⅱ「盤珪禪師と支考」という二編の論文より成る。第二章「支考俳論の諸相」は、蕉門きっての論客支考の最も得意とする俳論に肉迫した五編の論文Ⅰ「支考の姿情論」、Ⅱ「姿情論の継承」、Ⅲ「支考の虚実論」、Ⅳ「真草行の説」、Ⅴ「付方八体説の成立」を収める章段で、特に著者の関心の深い俳諧表現論がとりあつかわれており、本書の中心的作用をになう部分といえよう。第三章「支考と蕉風伝書」は、その支考の俳論を収める伝書『二十五条』と『白馬経』に初めてメスを入れたⅠ『二十五条』諸本の系統、Ⅱ『白馬経』考の二編の論文、第四章「俳風の転換―撰集論の視点から」は、えてして論に片寄りがちな支考研究を、実作の面から再検討してみようとしたⅠ『統猿蓑』試論、Ⅱ『伊新百詠』の俳風」の二編

から成る。なお、支考という男は俳文に関しても一言を持ち、さまざまな実験をこころみているが、第五章「俳文観の形成」はその方面の論攷二編、Ⅰ「支考の俳文観」、Ⅱ「庚午紀行」の問題」を収める。そして第六章「蕉風俳論の一面―許六俳論を通して」は、俳論の面でも俳文の面でも、ときに支考のよき同伴者であり、ときに厳しいライバルでもあった森川許六関係の論文二編、Ⅰ「取合せ論の検討」、Ⅱ「許六俳論の構造」から成る。さらに「付たり」として、先の『支考年譜考証』に基づく「新訂・支考年譜」が添えられていて便利である。

支考は俳壇勢力の上からいえば、最大派閥美濃派の領袖であったが、それだけに他派の連中から厳しい批判を受けることも多く、俳魔・俗物・衒学家・野心家等芳しからぬ評判を立てられてきた。そのせいもあって、これまで支考に関するまとまった著書は一冊もなく、論文でさえ数えるほどしかない。そんな支考像の歪んだ部分が、堀切氏の本書によってかなり修正されたといえよう。もちろん堀切氏にしても、支考を全面的に弁護しているわけではない。倫理的・人格的な面でかなり問題のある人物であることは否定しないのであるが、それはそれとして、彼の俳論に関する表現論やその指導理論を高く評価しているのである。

堀切氏は最初近代文学、とくに志賀直哉の研究からスタートしている。いきおい氏の興味は日本文学における表現の特性に向けられるようになった。氏が俳諧文学、とりわけその表現論に関心を寄せるようになったのも当然のなりゆきである。蕉門きっての論客各務支考は俳諧表現に関してすこぶる自覚的な男であり、そ

のことについて独自の工夫をこころみた俳人である。堀切氏が支考研究に取り組むようになったのは、氏の構想する日本文学表現論史に、この支考の業績が重要な位置を占めているとみたからである。

第一章の「蕉門支考論」は、そんな堀切氏の支考観を端的に示す論文であり、本書の総説として恰好の一篇である。氏は支考俳論の中心をなすものとして、その「姿先情後」説、虚実論を考え、それぞれについて略説したのち、その俳論がいかに展開変化していったかを、発句・連句の作風の変化と関連させて追跡している。また、美濃派の俳風がその思弁的高踏の俳論に似合わず、いわゆる田舎蕉門として、卑俗・平浅・作為的・理屈っぽいという非難に対し、それは地方的通俗さ、都市的軽妙さの違いはあっても、当代の俳壇に共通した基盤に支えられていたせいであり、独り美濃派のみが責を負うべき問題ではなく、むしろそれを新たな庶民詩としての俳諧大衆化実現への文学史的役割を十分果たした証しであると弁護している。なお、支考という人間の山師的性格を暴露したと悪言伝された彼の伴死問題（正徳元年、四十七歳のとき、伴って死んだと宣伝、自己の「終焉記」を草したり、追悼集『阿誰話』を撰じたりしたこと）についても、理解を示し、世人の嫉妬・中傷・非難からの逃避であり、風雅に親しむための風狂的行為でもあり、故園に跡を隠すためのまじめな隠遁宣言であって、師芭蕉の「閑関」を連想させるものがあるという。しかし、これは少し眞實の引き倒しの観がある。果してそこまで生真面目に考えていただろうか。私見によれば、支考はこの伴死後、門人

蓮二坊・渡部ノ狂、白狂などの変名で、自己の俳論の注釈作業を積極的に推し進めている。ということとは、世人に理解されることの少ない自己の俳論を、自己宣伝の非難をかわしながら心ゆくまで注釈するための方便としてこの伴死は企てられたものではなかったかと思う。つまり果てしなく自注する精神の考え出した窮余の一策ではなかったらうかと考えたい。

「盤珪禪師と支考」は、支考が盤珪禪師に師事したこと、および支考の「俗談平話」を説く俳論や指導方法が、盤珪の「平話説法」を唱導し、庶民の実用禅において「仮名法語」による易行の安心法を提唱・布揚したやり方に学ぶところが大きいと主張した論文であり、合わせて『白馬経』にいう芭蕉の盤珪參禪説は根拠がないという。

第二章「支考俳論の諸相」は、論客支考の俳論の本質に肉迫した力篇五つより成る。『俳諧十論』に顯著にあらわれているように、支考の俳論はすこぶる思弁的であり、また日本人の文学論としては珍しく組織的である。このような複雑な文学論を考究する場合、その論の基本的構造を的確に把握することが先決であり、研究の可否もそれによって左右されてしまう。堀切氏はその座標軸として、支考の「姿情論」「虚実論」「七名八体説」の三つを選んだ。

「支考の姿情論」はその座標軸の一つである姿情論を考察した論文である。堀切氏によると、支考の姿情論は元禄十二年刊の『続五論』に発し、享保四年刊の『俳諧十論』に理論的完成をみたもので、いうところは「姿は先にして情は後なりと決すべし」

（俳諧十論）という姿先情後の説である。そしてそこには支考の「いにしへの俳諧は風情ありて風姿なし」（続五論）という貞門・談林への批判意識と、それを踏まえたうえでの新しい姿重視の蕉風俳諧という支考の俳諧表現史観が認められるという。ところが、その支考の姿先情後の説は、『俳諧十論』以降次第に啓蒙家支考の大衆指導上の便宜的手段としての様相を濃くしてゆき、その結果彼等美濃派俳諧の作風も低俗化、浅薄化することになったのである。さらにまた、この姿先情後説はもともと俳諧表現で小ざかしい「私意」を去り、「理屈」を排斥して、「天理」に従うことを説くものであったが、それは芭蕉の「造化随順」の思想ともつながり、「心のねばりある句」を排する「かるみ」の説を承けるものでもあった。以上が堀切氏のいう支考の姿情論である。支考独りの表現論というより、蕉門俳人支考の立場を十分考慮した論文として傾聴に値する創見に満ちており、本書の中でも特に注目すべき力作である。しかも驚くべきことに、本編の中でも特に注考に関する処女論文であった。もって氏の支考研究がいかに正確な見通しの上に成立していたか知るべきであらう。

堀切氏によると、支考の「姿先情後」の説も、理念としては伝統的な姿情融合の詩境を理想としていたのであるが、ただ当時の俳壇状況との関係で、方法論としては「姿」すなわち物の形象・イメージの表出を重視したものと受取られた。そしてそれが芭蕉以後、享保俳諧における支麦の徒、いわゆる田舎蕉門の風調を決定した。これに対し、享保俳壇におけるもう一つの潮流は、一句の作意を重んじ、趣向の巧みを楽しむ其角・沾徳ら江戸座の連中

の動きであって、彼等は平淡・ただごとを排し、「情」の厚き句を好む、いわば「情先姿後」の表現論を奉じていた。「物のまこと」か「俳諧の作意」か、「姿」重視か「情」の重視か、蕉風俳諧の成立の過程で顕在化したこの対照的な表現論の二極分裂、そしてそれに続く対立・相互批判・統合が以後の俳諧史のダイナミズムそのものを形成するという認識が堀切氏にはある。そんな認識に基づいて、その後天保期までの姿情論・表現論を整理してみせたのが、「姿情論の継承」という論文である。俳壇の動向史のような記述ではない、文学の表現に直接結びつく姿情論を軸にして俳諧史を構想したのは、いうまでもなく堀切氏の独創であって、日本文学の表現論史に関心を持つ氏にして初めてなしうる好企画である。氏は姿情論展開の種々相は、「姿先」尊重の美濃派直系の立場、「情先」強調の江戸座系の主張、またその中間に位置する「姿情兼備」「姿情融合」の見地と——三者それぞれを軸として、その間の微妙な往還運動の中でとらえられると言い、時代・俳系列の動きを適宜選択・統合しながら、これを（一）姿先の系列、（二）情先の系列、（三）姿情兼備の系列の三系列に分類、各系列グループごとに姿情論を検討概観している。新しい視点からのアプローチであるから、例えば天明中興俳壇の動きなどに対しても新しい光があられており、啓発されるところが大きい。ただ紙幅の関係で略筆された部分も多く、蕪村が姿情兼備を考えていたと、どういう根拠をもって判断されたのか記述がなかったり、鳥酔系統の姿先情後説に対する反指定として提起されたと思われる麦水・暁台・蕪村らの情先の俳諧観を、逆に鳥酔が麦水らの俳諧観に対する反

措定として姿先情後説を用意したかのごとく記述しながら、その根拠が示されていないかったり、二三の問題がない訳ではない。いまだ一度紙幅を増やして、詳説されるよう切望する次第である。

「支考の虚実論」は、従来の研究が支考の虚実論はどのくらい芭蕉の虚実論を正確に伝えているかという一点に関心を集注して執筆されていることを批判し、支考の虚実論を支考その人の虚実論として、それが文学論的批判にどのくらい堪えうるものかを検証した論文である。氏の説くところでは、支考の虚実論には「万物は虚に居て実に働く。実に居て虚に働くべからず。(中略)抑、詩歌・連俳といふ物は、上手に嘘をつく事なり。虚に実あるを文章と云」(二十五箇条)というように、風雅論的、形而上的レベルの虚実論と、表現論的レベルの虚実論がある。その中、風雅論的虚実論は、一面では造化随順を説く芭蕉の風雅観を根本的に継承しながら、一面では支考独自の要素を加えて、紛れもない支考流の発展的解釈として成立しているという。またこの支考独自の虚実論の成立は主として表現論の方面に強く作用し、組織的虚実理論として大成するのであるが、そのころみは極端に走り、ついには形式化・方便化し、ときに観念的なことばの遊戯のごときものに墮しているという。

続く「真草行の説」は、日本における真草行の考えが、あるときは統一的・総合的に、またあるときは個別的・分類的に解釈されつつ、書道はもとより俳諧を含めた各種の芸道論の理念として用いられて来た様子を概説し、それらに共通して認められる大きな共通点として、一に史的変遷論として説かれる場合に、概し

て草を尊重する傾向があり、蕉門にあっては俳諧史における「草」としての蕉風俳諧という理解があったといい、二にそれを形態論・風体論と見る場合、様式原理・理念としての類型化へ走る傾向があるということを指摘した論文である。

支考の俳論を考える場合、彼の七名八体説を見落すことはできない。この説については既に頼原退蔵・宮本三郎・東明雅等先人の研究があるが、堀切氏はこの説の成立過程を支考自身の著書と美濃派の伝書の中に探り、その認識論的背景ないし思想的基盤として、支考の仏教的素養のあることをつきとめている。それが第二章の最後の論文「付方八体説の成立」である。本編によって、七名八体説の研究は、ひとまず完結したといつてよからう。

第三章「支考と蕉風伝書」は、「二十五条諸本の系統」と、「白馬経」考より成る。「二十五条」(二十五箇条)は「蕉門支考が、師芭蕉の遺語・遺教などに基つきつつ、これを新たに整備・統合し、また自己の見解を加えて発展させながら、蕉風俳諧の要諦についてまとめあげたもの」というのが通説であるが、堀切氏は国会図書館本「ひるのしき」の書入れ訂正をもとに、流布本の「二十五条」の成立過程をみごとに解明してみせた。また支考の俳論の中では聖典に等しい位置を占める幻の伝書「白馬経」の正体も、探偵もどきの鮮やかな手際であばき出すことに成功している。

第四章「俳風の転換―撰集論の視点から」は、「統猿蓑」を「炭使」の俳風の延長と考える従来の通説を改め、むしろその名の示す通り、「猿蓑」の俳風を継承するものという、「統猿蓑」試論

と、平明の伊勢派俳諧の先唱ともいふべき『新百韵』が、世にいうほど平俗ではなく、『統猿蓑』と同じく雅俗はどよくバランスをとった作品であることを論証した『伊勢新百韵』の俳風の二編を収めている。

日本表現論史に関心を持つ堀切氏にとって、俳文の表現論というのも避けて通ることの出来ない問題である。その意味から氏は支考の俳文観に注目し、第五章に「俳文観の形成」を用意し、「支考の俳文観」を草したのであるが、論評するにはもはや残された紙幅が無い。氏は既にこの仕事の延長として「俳文集の編纂」(『文学』一九八〇・三)なる労作を著していることを付け加えるに止めよう。ただ本章のもう一編「庚午紀行」の問題は「庚午紀行」の芭蕉草稿が実在したという仮説が十分な説得力を持つとは

いえず、残念ながら、氏の説に賛成する気にはなれなかった。

第六章「蕉風俳論の一面——許六俳論を通して」は蕉門のもう一人の論客森川許六の俳論、ことにその「取合せ論」と「血脈説」とを考究した章である。いまその結論の部分を紹介すれば、許六の血脈説には古今貫通する風雅の誠をせめるといふ態度論的(伝統論的)血脈とともに、その誠をせめる具体的方法としての個々の作品に即した表現論的意味の血脈があり、その後者が発句表現論としての取合せ論につながっていくという。「取合せ論の検討」「許六俳論の構造」。忽々の間、意を尽さないままついに紙幅も尽きた。最後に本書が芭蕉翁顕彰会推薦による昭和五十七年度の文部大臣賞を受賞したことを報告し、氏とともに慶びたいと思う。

(昭和57・4明治書院 A5判 三九二頁 四八〇〇円)

新刊紹介

紅野敏郎編

『新感覚派の文学世界』

——「文芸時代」を中心に——

新感覚派と呼ばれた人々、すなわち「文芸時代」に集った作家達への言及である。ただし、必ずしも「文芸時代」掲載作品に限定されたものではなく、冒頭に並ぶ四本の横光利一論で扱われた「御

身」「悲しみの代価」「春は馬車に乗って」「上海」はすべて他誌掲載作であるし、「文芸時代」前史としての「文芸春秋叢書」、及び周辺人物としての藤沢恒夫、大養健などもとり上げられている。他には川端康成が二本、諏訪三郎、片岡鉄平、鈴木彦次郎、加宮貴一への言及が各一本ずつ並び、資料として「よみうり抄」による新感覚派日録」と雑誌「文芸」の細目を取る。

本書は、大学院近代ゼミにおける長期

にわたる演習の成果ということであり、力のこもった論文が多く、また様々な方法への試みなども見うけられ、いかにも若い研究者達の論文集という小気味のよさを感じた。収録スペース等の関係から、割愛されたものもあるようだが「文芸時代」関係の重要人物として、中河与一、岸田国士らへの言及のないことが、やや惜しまれる。今後の展開に期待したい。

(昭57・11 名著刊行会 四六判 三一八頁 二五〇〇円)〔柳沢孝子〕